

保育実習準備室の役割－可能性と課題－

森木 朋佳

A Study on the System of “Hoikujishshu Junbishitsu” –Possibilities and Difficulties–

Tomoka Moriki

本稿は、「必要な情報が入手できること」、「その場で情報を利用したり、活用したりできること」、「助言が受けられること」の三つに重点をおいて整備・運営されている保育実習準備室が、保育者養成課程においてどのような意味を持つのかについて考察したものである。保育実習準備室は、学生の実習への準備を支援する場所として設置されているが、学生の自律的な学びを支援する仕組みや、教員の教材開発につながる可能性を持った場所でもある。さらに、これらの機能を拡大することで、現任者の主体的な研修の場として位置づけることもでき、更なる発展が期待できることが示唆された。

Key Words: [保育の質] [素材・教材研究] [学び直し] [アクティブ・ラーニング]

(Received September 24, 2015)

はじめに

鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻は、2002（平成14）年に定員30名の指定保育士養成施設として認可を受け、現在は定員65名、幼稚園教諭二種免許状・保育士の両資格が取得可能な専攻である。本稿で取り上げる保育実習準備室は、こども学専攻開設の翌年に設置した。きっかけは、学生を専攻として初めて保育実習に送り出すにあたり、実習要綱や評価表の内容について助言を受けるために姉妹校であり既に保育士養成に取り組んでいた長崎純心女子大学を視察したことである。長崎純心大学には、「実習資料室」という実習に関する事務全般、保育科の備品管理、管理物の学生等への借用手続きなどを行う部屋が設置されていた^{注1)}。実習園の情報が園ごとにファイリングされており、それら資料は、次に実習に行く学生に助言する際に参考にしていただくとのことであった。実習園で学生が経験した実習内容に関する情報の継続的な収集とその管理の必要性を強く感じたことと、保育士養成を始めたばかりで体制を作りやすかったこともあって、本専攻開設2年目の4月に保育実習準備室の名称を持った部屋を開設することができた。保育実習準備室は、保育実習担当であった筆者の研究室とつながった場所に作られ、設置から3年間は、実習に関する情報の収集・管理とそれらを活用した学生への実習上の助言が主な機能であった。また、2003（平成15）年4月から2010（平成21）年3月の6年

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科こども学専攻（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

間は、職員が常駐していた。

現在の保育実習準備室の在り方に大きな影響を与えているのは、京都市総合教育センターに設置されているカリキュラム開発支援センター、通称「カリセン」の取組みである。2006（平成18）年に、カリキュラム開発支援センターを視察する機会を得た。注目したのは、同センターが「確かな授業づくり」を支援することを目的に設置されていたこと、「よりよい授業の創造」「教材・教具の開発・作成」「必要な情報の入手」という三つの柱があり、それらが具体的な形で実現され、運用されていたことである^{注2)}。視察後、センターの取組みを参考に方向性を持って保育実習準備室を整備し、今日に至っている。

ところで、平成26年度全国保育士養成セミナーにおいて、「アクティブラーニングとラーニング・コモンズをめぐる取り組みについて」と題された分科会で話題提供者の一人として話題提供をする機会を得た。本学が平成24年度に採択された私立大学教育研究活性化設備整備事業を活用して整備したラーニング・コモンズの概要について紹介するとともに、大掛かりな設備を必要とせず、短期大学の保育者養成校で取組める、学生が主体的に学ぶ「仕掛け」として保育実習準備室の設備とコンセプトについて紹介したところ、いくつかの反響をいただいた。これまで保育実習準備室は、保育実習に参加する学生に少しでも力をつけさせたいという思いで、筆者が中心となって整備・運営してきた。反響があったということは、取組みが評価された、あるいは、保育実習をはじめとする資格取得のための実習の機会を、学生にとっていかに意義あるものにできるかという、同じような悩みを抱える保育者養成校の教員にとって、興味関心を引く内容であったということであろう。現状を振り返ってみたとき、本学の保育者養成課程に在籍する学生の多くは、保育士資格と幼稚園教諭二種免許状の取得を目指しているため、1時間目から5時間目まで授業が入っていることも珍しくない。実習の準備をどれだけ行うかは、実習の機会をどれだけ生かすことができるかに少なからず関係していると感じるが、通学の時間を考えると、日々の授業の予習・復習の時間も十分に確保できるかどうかという学生もあり、実習のための準備時間を十分に確保できていない現状もあると考えたほうが自然である。こうした、準備不足の状態で実習に臨む学生が少なからずいるという現状は、保育の質向上が求められる今日、学生個人の問題として楽天的に捉えることはできない^{注3)}。

以上のような問題意識から、保育実習準備室の方針や機能を整理し、保育実習で必要とされる実践力の向上や、保育者養成校の役割である質の高い保育者養成という視点から、保育実習準備室がどのように位置づけられ、どのような可能性を持っているのかについて検討したい。

I. 保育実習準備室の概要

1. 保育実習準備室の整備にあたって

保育実習準備室を整備するにあたって、資料や道具をだけを設置し、学生に自由に開放するということは考えていなかった。学生の状況を踏まえると、設置され、設備は整えられているが、利用はされない場所になる可能性があったからである。本専攻は2年制の保育者養成課程で、授業が1時間目から4時間目あるいは、5時間目まで詰まっているということがほとんどである。加えて、5時間目の授業終了後から、規定の下校時刻までは1時間しかない。空き時間が

殆どない学生たちが、立ち寄り、実際の利用に結びついていくためには、それなりの工夫が必要であると考えていた。そこで、整備をする上では、「今ここで」というキーワードを大切にした。さらに、カリキュラム開発支援センターが利用者を主体とし、「カリキュラム開発を支援する」ことに重点を置いていることに注目し、「必要な情報が入手できること」、「その場で情報を利用したり、活用したりできること」、「助言が受けられること」の三つの視点から整備を行った。

職員が常駐していたこと、筆者の研究室とつながった場所に設置できたことで、「助言が受けられること」は、保育実習準備室設置段階からある程度機能していた。そのため、整備にあたっては、「情報の入手」と「情報の活用」に重点をおいた。具体的には、保育雑誌を中心とした保育資料を閲覧できるようにするとともに、色画用紙や絵の具、クレヨン等、保育に必要な材料や道具を準備し、学生や教員が使用できるようにした。また、2009（平成21）年には、保育実習準備室にパソコン・プリンター（複合機）を設置することで、インターネットを利用して学内図書館の蔵書検索を行ったり、必要な情報の検索を行なったりできるようにした。

2. 保育実習準備室の概要

ここでは、主に設備の面から、保育実習準備室の概要について整理してみたい。

(1) 設置場所

鹿児島純心女子短期大学1号館304室（鹿児島市唐湊4丁目22-1）

(2) 設備^{注4)}

保育実習準備室の広さ：約27.3平方メートル（約3.9メートル×7.0メートル）

保育実習準備室の見取り図は、図1のとおり。

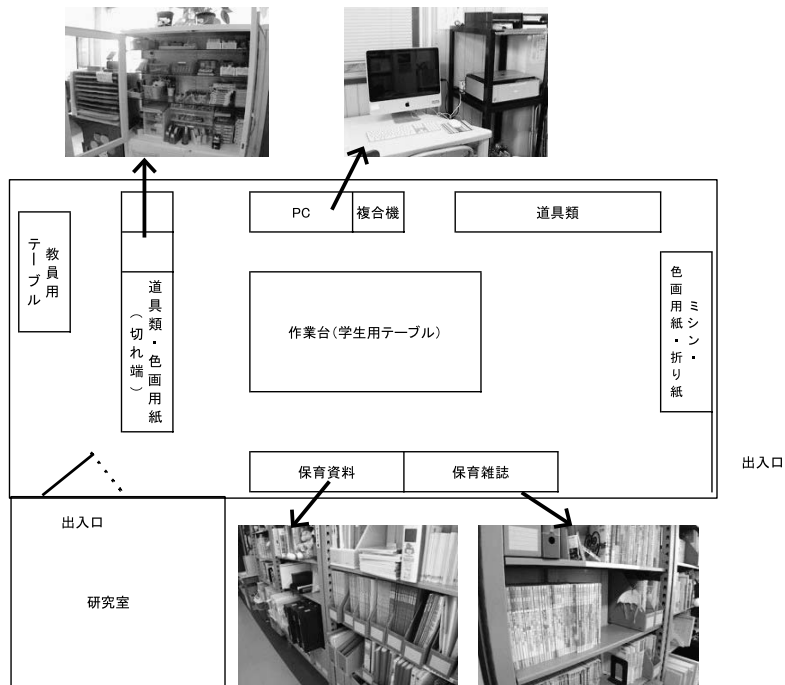


図1 保育実習準備室の見取り図

- ① 保育関連図書（絵本・紙芝居・書籍・CD等：261点）
 - ② 保育雑誌（2誌：新刊及び既刊3年分）
 - ③ 保育関連資料（上記以外の周辺領域雑誌・「切り抜き速報 保育と幼児教育版」（2002年～現在）・園の「おたより」・『こどものとも』『かがくのとも』『かがくのとも』5種類の折り込みふろく等）
 - ④ 学生用パソコン一式（1台）
 - ⑤ 複合機（プリンター・スキャナ：1台）
 - ⑥ 道具類^{注5)}（のり・はさみ・カッター・絵の具・ポスターカラー・クレヨン・ペン等：50種類以上）
 - ⑦ 材料類（色画用紙・折り紙・クラフト紙・カラーセロファン・紙コップ・紙皿等：30種類以上）
 - ⑧ ミシン（1台）
 - ⑨ 沐浴人形（1体）
 - ⑩ ベビー用品（ベビー服・おむつ・哺乳瓶等：10種類以上）
 - ⑪ その他（CDデッキ・ビデオカメラ他等）
- (3) 学生の利用時間及び方法
- 授業開講日の午前9時～午後6時45分
- 管理者（筆者）が在室している場合には、原則としていつでも利用できる。不在時に利用する場合は、「保育実習準備室利用届」に記入し、許可を得て利用する。土日及び長期休業中は原則として利用できない。保育実習準備室の物品を持ち出す場合には、「備品貸出し簿」に記入する。
- (4) 利用対象者
- こども学専攻1・2年生及び卒業生、こども学専攻の教員^{注6)}

Ⅱ. 設備・運営上の工夫

ここでは、保育実習準備室で行っている設備上・運営上の工夫についてまとめてみたい。

1. 設備面での工夫

「必要な情報が入手できる」ための工夫としては、パソコンと保育雑誌の設置が挙げられる。パソコンは学内LANに接続されているので、学内図書館の蔵書検索をしたり、園のホームページを閲覧したりすることができる。保育雑誌については、2誌、新刊と既刊3年分と資料数としては多くないが、附属図書館に所蔵されていない保育雑誌を設置している。加えて蔵書検索が行える環境を整えたことで、資料不足を補っている。

「情報をその場で利用したり、活用したりできる」ための工夫は、材料・道具類は比較的手に入りやすく保育所や幼稚園の製作活動でもよく使用されているものを中心に、必ず複数種類を準備するようにしていることである。例えば、絵の具類は、水彩絵の具・ポスターカラー・アクリル絵の具・マープリング用インク等、数種類が準備されている。これは、はさみやのり等の他の道具・材料類についても同じである。前述のとおり限られたスペースであるので、全てについて学生の人数分準備しているわけではないが、学生に言わせると「何でもある」と感

じられる程度には準備されている。

「助言が受けられる」ための工夫は、保育実習準備室の設置場所にある。保育実習準備室の中に、筆者の研究室の出入口があるため、試作の段階でつまづいた時や、資料の内容を発展させたいとき等にすぐ助言を受けることができる環境となっている。また、研究室の扉を閉めてしまうと、学生が話し合っていることは殆ど聞こえないが、扉が開いている時は聞こえているため、困っていることが感じ取れた時には、教員の側から声をかけることもできる。実際の例を挙げてみる。プラスチック製の醤油容器に色水を入れ、金魚に見立て、金魚すくいをしたいと考えていた学生があった。保育実習準備室で色水を作り、容器に入れて試作してみたが、色水が白く濁っていることが気に入らないようであった。そこで、水彩絵の具に不透明絵の具と透明絵の具があることを伝え、透明絵の具で試してみるよう助言したところ、学生がイメージしたものに近くなった。この事例が示すように、十分に素材や道具類が準備されていても、学生の知識不足等が理由で十分に活用されない場合もあり、助言機能があることで、効果的な素材研究・教材研究につながる可能性があると考えられる。

2. 運営上の工夫

運営上の工夫としては、前述の「助言が受けられる」ことに加えて、保育実習準備室の授業での活用に取り組んでいる。

保育実習準備室の場所を知らない、一度も利用したことがないという学生がいる状況では、保育実習準備室は道具が設置された部屋で終わってしまう。そこで、「こども学フィールドワークⅡ」という授業で、保育実習準備室を利用する機会を設けている。1年次に配当されている「こども学フィールドワークⅡ」という授業では、就学前の親子を対象とした「純心こども講座」での実習を経験する。この「純心こども講座」の準備を行う際に、必要な材料の受け取りや、道具を借りるために学生たちは保育実習準備室を利用することになる。平成27年4月1日から平成27年8月2日までの前期開講期間に材料を取りにきた学生数はのべ161名で、同じ学生が何度も利用している可能性はあるが、1年生の在籍数の約2.7倍である^{注7)}。この数は、材料を使用する際に記入する用紙の枚数から算出しているため、実際の保育実習準備室利用者数はそれ以上になる。「純心こども講座」の主な開講日は、5月から7月に設定されているため、こども学フィールドワークⅡの授業での利用や、学生たちの自主的な準備のための利用によって、1年前期の段階で保育実習準備室という部屋が存在が、学生たちに認知される。

保育実習準備室の積極的な利用へつなげる工夫としては、筆者が担当する保育実習指導の授業での取り組みが挙げられる。本専攻では1年次の2月に初めての保育実習に参加するため、保育実習指導Ⅰの授業は1年次に通年科目として配当されている。この授業で学生は、「保育ノート」と呼ばれるノート作りをおこなっている。保育実習指導の授業での内容を記録していくノートであるが、目指しているのは「保育のネタ帳」のようなノートである。「保育実習等の学外実習で、このノートを見れば、必要なことが分かるノートを作る」を目標にしているため、学生は板書を写し取るだけでなく、実際に切ったり、貼ったりしながら（図2-1）自分で工夫してノートを作ることが求められる。図2-2は学生が作成した、手遊びのページである。右側のページは、授業で紹介した手遊びの資料を貼り付け、左側のページは自分で記入している。授業では、「数

字の手遊びのページを作ってみよう」という提案とともに、保育実習準備室にどのような資料があるかを合わせて紹介している。このように授業で「保育ノート」の作り方を伝え、学生達自身もノートのページを増やせるようにすることで、保育実習準備室の利用につなげている。

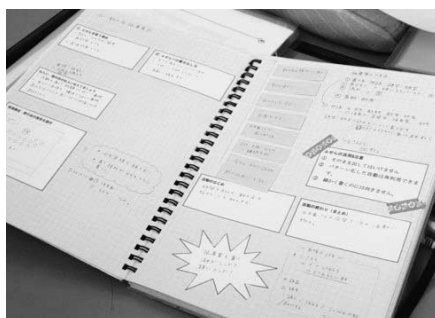


図2-1 保育ノートの例 (授業の記録)



図2-2 保育ノートの例 (手遊びのページ)

Ⅲ. 授業改善の取組み

保育実習準備室は、学生が主体的に学ぶための場所であるが、ここを利用する学生とのやり取りを通じて、教員の授業改善に結びつくことがある。ここでは、授業での活動を保育所で実施し、授業の再構成を行った事例について紹介したい。

1. 取組みの概要と内容の実際

資料1～資料3は、2011（平成23）年におこなった授業実践の内容と、その実践を元に2012（平成24）年に保育所で実践した内容を示したものである。

資料1に示したように、筆者が担当している保育実習指導の授業において、20メートルの不織布に絵の具で足型をつけて大きな絵を描くという活動をおこなった。足型をつけるまでに、魚の形を切り抜き不織布に配置する作業を行っている。授業者（筆者）の授業のねらいは、「クラス単位で行う活動を体験する」「複数の授業回を必要とする活動を体験する」「学生自身が活動の楽しさを体験する」であった。学生にとっても筆者にとっても、20メートルの不織布を利用するのは初めての経験であった。出来上がった作品を床から持ち上げ、不織布を揺らしたところ、学生が作品の下に潜り込み、魚が泳いでいると声を上げるような場面が引き出された。

授業後、保育実習準備室を訪れた複数の学生が、この活動を実習でもやってみたいけれど、絶対大変あるいは無理だという旨の話をしていた。また、どうやったら実習生の立場でも、こうした大掛かりな活動を行うことができるかといった質問をした学生もいた。これらの質問からは、20メートルの不織布に足型をつけるような大掛かりな活動は、時間やスペースあるいは実習園の理解などの問題をクリアしなければ、実習ではできないだろうという学生の気持ちを感じ取れた。そこで実際



図3 足型をつけた不織布（部分）

に保育所で活動を実施し、この活動は保育現場でも実施することができるのか、また子どもと活動するためには、どのような工夫を行う必要があるのかについて検討することにした。

改善・工夫が必要ではないかと考えていたことは、活動のための広いスペースを確保できるか、実施時間を確保できるか、足についた絵の具をスムーズに落とすことができるかの三点であった。保育所での実施までに、趣旨の説明と依頼、実施内容についての打ち合わせ、道具の搬入等のための4回程度訪問している。資料2は、初回の打ち合わせを経て、再度園に提示した内容を示したものである。資料3は、最終の打ち合わせ後、筆者が作成した当日の計画案である。実施日時・内容等は以下のとおり。

実施日時：2012（平成24）年10月30日 午前9時00分～12時30分（準備・片付けを含む）

対象：A市立B保育所4歳児クラス（15名）・5歳児クラス（15名）計30名

方法：長さ5メートルの不織布を2枚準備し、女児と男児に分けて実施した。

展開：活動は筆者の他に教員1名、本学卒業生1名の3名で、次の手順で展開した。

- ① 活動の説明をする。
- ② 足型をつける。
- ③ クレヨンで縁取りをする。
- ④ 作品を鑑賞する。
- ⑤ ハロウィンにちなんだダンスをし、活動内容を振り返る。

実施前の打ち合わせで、10月に実施することになったので、活動テーマは「ハロウィン」となった。型紙作成は、クラス担任によって保育の中で製作活動として実施（10月18日）していただいた。当日は、作成された型紙を不織布に貼り付けた状態のものを持参した。

2. 実施の結果

実施前に検討が必要な事項として、活動のための広いスペースを確保できるか、実施時間を確保できるか、足についた絵の具をスムーズに落とすことができるかの3つを考えていた。やはり、活動のためのスペースを確保することは難しく、20メートルの不織布を5メートルの長さにカットし、活動を行うことになった。長さが短かったため、不織布にはすぐに色がついた。子どもたちが活動に満足するまで足型をつけると、既に色がついたところに再度足型をつけることになるので、ビニールシートの下まで絵の具が滲んでしまっていた。また、足型をつける活動としては5メートルの不織布で十分であるが、20メートルの不織布を利用した際に生まれたような布の動きや、思わず作品の下に潜り込んだような行動は十分に引き出されない可能性がある。この活動を行うにあたってスペースの確保は、今後も大きな課題といえる。

実施時間については、保育所側に協力をいただけたことで、型紙を作る活動と足型をつける活動を分けて行うことができた。また、後日、今回の活動のまとめとして、活動の様子を描く活動にも発展させていただいた^{注8)}。足についた絵の具の処理については、時間内に完全には絵の具を落とすことができなかった。しかし、保育所が事前に、足に絵の具がついたまま帰宅することがありうることを保護者に伝えてくださっていたこと、出来上がった作品を園内に掲示してくださったため、大掛かりな活動内容であったことが保護者にも伝わり、足が汚れたま

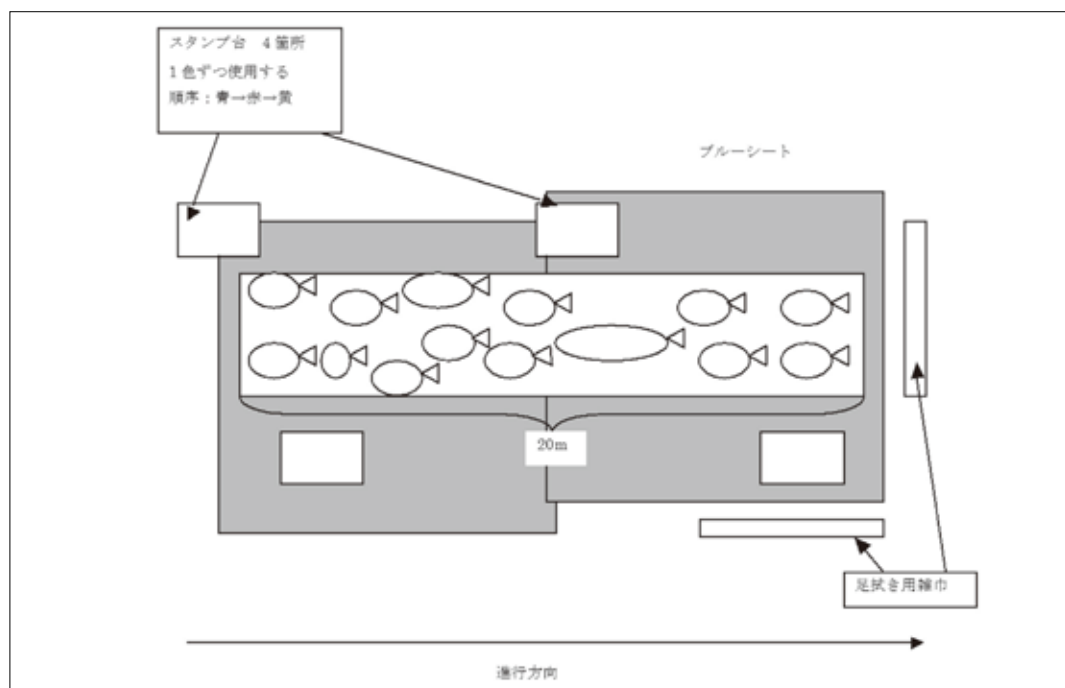
までであっても特に問題にはならなかった。実施時間と絵の具の処理については、保育所側の全面的な協力と配慮がなければ、課題として残ったと思われる。学生が実習などで実施する場合には、実習園との十分な打ち合わせが必要であり、学生が十分に理解を得られる説明や打ち合わせをすることができるか、また、1時間から1時間半程度のまとまった活動時間を確保できるかが、実習での実施に影響を与える要因となると考えられる。

【実際に行った内容】

資料 1

主な活動の内容	1m×20mの不織布を用いて「水族館」を表現する
対象	短期大学2年生（保育士・幼稚園教諭の資格取得課程の学生）30名

【環境構成】



【展開】

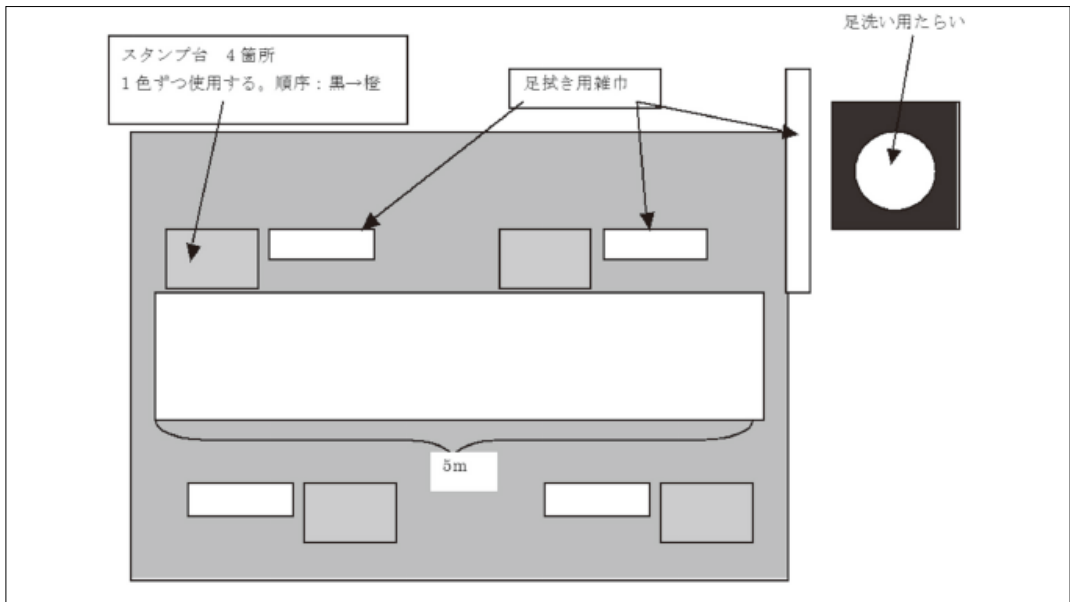
- ① 新聞紙（半分のサイズ）で、好きな魚を作る。
 - ・下書きをし、はさみで切り抜く。
- ② 切った魚（型紙）を不織布に並べる。
 - ・配置が決まったら、メンディングテープなどで固定する。
- ③ 絵の具を準備し、色をつける。
 - ・絵の具：水＝1～2チューブ：500～1000ml → 簡易スタンプ台（トレイ＋スポンジ）
 - ・足に絵の具をつけ、不織布の上を歩く。→ 一方方向、W字を描くように移動する。
 - 時々、簡易スタンプ台を移動させ全体的に色付ける。
- ④ 魚の形をクレヨンでかたどる。
 - ・魚（型紙）をはがし、あらわれた白い部分を手がかりに、クレヨンで魚の形を描く。
- ⑤ 白い部分を着色する。
 - ・手に絵の具をつけ、白い部分に色付けする。
- ⑥ 鑑賞する

※ 環境構成、絵の具の準備は、進行状況に合わせて授業者（1名）が行った。

資料2

【実施したい内容】

主な活動の内容	1m×5mの不織布を用いて「ハッピーハロウィン」を表現する
対象	4歳児クラス（15名）・5歳児クラス（15名）
目的	授業「保育実習指導」で行った保育実践研究（水族館を作る）の内容を、実際に子どもを対象として実施することで、内容の検証を行う。 ・「子ども」を対象とする際の配慮の考察 ・実際の保育の場にあった活動への転換 ・実際の子どもの反応の検証



〈展開計画など〉

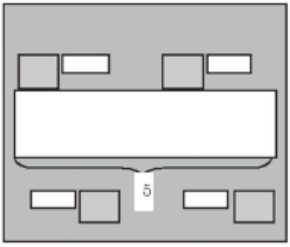
目安	内容
30～40分	① 型紙作成→配置 ※貼付けにやや時間を要します
30分	② 型紙の上からの色づけ
20分	③ クレヨンでのかたどり→白い部分の色付け
15分	④ 片付け（足洗い）

※ 型紙の作成を事前にお願ひできるのであれば、当日は色づけのみになります。
型紙作成・配置の済んだものをお持ちすることもできます。

〈打合せが必要な内容〉

- ・日程 可能であれば10月30日に実施させていただきたいです。
- ・実施内容 テーマは「動物園」でよろしいでしょうか。「魚」「葉っぱ」をテーマにすることも可能です。ご検討ください。
保育所の生活の流れを優先し、②のみの実施であっても問題ございません。
①～④を1日かけて実施する場合は、全体の流れ等再度打合せをお願いいたします。
- ・実施方法 手もしくは足に絵の具をつける方法で実施してよろしいですか。
代替手段としては、霧吹き、ローラー、はけを考えております。

資料3

主な活動の内容	1m×5mの不織布に「ハロウィン」の様子を表現する。	主な活動の環境構成	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・型紙に絵の具で色づけすることで、偶然に生まれる色や形を楽しむ。 ・絵の具の感触を楽しむ。 ・友だちと協力して、一つのものを作りあげる。 		
時間	環境・準備	子どもの活動	担当者の動き
9:15 (10)	ブルーシート パレット 絵の具一式 構成済みの不織布 雑巾		荷物の搬入
9:25 (20)	<ul style="list-style-type: none"> ・絵の具の準備 黒×5, 橙×3, 緑×3 	<ul style="list-style-type: none"> ・担当者の話を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちに簡単に挨拶し、今日の活動について伝える。 ・絵の具を準備する。 ①スポンジに水を含ませ、トレイに敷く。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ブルーシートの準備 シート4枚 布テープ 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと協力しあいながらブルーシートを広げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ②①の上に絵の具を出す。 ・子どもたちと一緒にブルーシートを広げ、必要な部分は固定する。
9:45 (30)		<ul style="list-style-type: none"> ・注意事項を聞き、活動を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の展開について説明する。 ①型紙の上から着色 ②(クレヨンでかたどる)※省略可 ③白い部分に着色
	濡らした雑巾	<ul style="list-style-type: none"> ・足をパレットにつけ、不織布のうえを歩く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・注意事項について確認してから、活動を始める。 ①走らないこと ②パレットの数、譲り合って ③友だちを押さないこと
10:15 (20)	クレヨン (黄・赤×30)	<ul style="list-style-type: none"> ・一度足を拭く。 ・型紙をはずし、クレヨンで形を取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体に色がついてきたら、足を軽く拭き、型紙をはずす。 ※絵の具はかすれる程度でよい。
		<ul style="list-style-type: none"> ・手で、白い部分を塗る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・型紙が外れたら、クレヨンで形を取る。 ※時間によっては、この工程を省略
10:35 (15)	雑巾・足拭き用タオル	<ul style="list-style-type: none"> ・順番に足を洗う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・不織布の白い部分に、今度は手で色付けをする。
10:50		<ul style="list-style-type: none"> ・できた作品と一緒に鑑賞する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・色づき具合を見ながら、少しずつ足を洗いにいくよう声をかける。 ・作品を鑑賞し、今日の活動を振り返る。

3. 授業改善の内容

(1) 実施方法の改善

学生がこの活動を実習で実施しようとする、スペースの確保と同様、大きな問題になるのは、足についての絵の具の処理である。2013（平成25）年度の授業では、右図のように足にビニール袋を履き、その上から靴下を履くという方法で実施した。予想通り、活動後にビニール袋ごと脱いでしまえば、足は汚れることがなく、片付けの時間も大幅に短縮された。絵の具の冷たさを感じるためには、水分の量を増やす必要があるため、絵の具が乾くまでに時間がかかるという新たな課題はあるが、学生が実習で実施できる方法という観点からは、この方法がよいと考えられる。



図4 絵の具の処理を意識した工夫

(2) 授業展開の改善

保育所での実践を通して、足型をつける活動は、子どもにとっても保育者にとっても魅力的な活動であることを確認することができた。また、今回のような複数回に分けて行う必要のある活動は、日々の保育の連続性を学生に感じさせるために有効であると思われる。以上を踏まえ、2013（平成25）年度以降の授業では、次の点を意識しながら授業を展開した。

一つ目は、クラス全体で取り組むような活動を授業に取り入れることである。これまで自身が担当した保育実習指導の授業では、記録の書き方や指導案の作成方法といった、実習で直ぐに求められる技術・技能を中心に扱っていた。学生には、4歳や5歳はクラスみんなで取り組む活動もできるよと口頭では伝えながら、学生たちが作成する指導案の殆どが個人の製作活動を題材にしていた、あまり疑問に思うことはなかった。学生と大きな活動に取り組み、それが、やってみたいという意欲につながったのは、学生自身が活動の楽しさを感じるとともに、集団での活動によって何が生まれるのかを体感できたからではないだろうか。体験的な学びを重視した授業を展開するにあたっては、何を体験すればよいかについて授業者自身が深く知る必要があると考え、その視点からの授業改善に取り組んだ。

二つ目は、複数回に分けて行う必要のある活動を授業にとり入れることである。多くの場合、実習で学生が取り組む指導実習は、1日のうちの切り取られた時間である。これは園の実情や学生の力量から考えた時、当然ともいえるが、保育の連続性をキーワードにしながらも、十分にそのことを感じる機会のない実習になる可能性もある。実習で何が経験され、何が経験されていないかを意識し自覚的に授業を展開することで、実習でも経験されにくい事柄についても取り扱い、学生の学びが深まるように努めた。

Ⅳ. 考 察

1. 「今ここで」できることの意味

保育実習準備室を整備するにあたってのキーワードは、「今ここで」であった。これは、学

生が自律的に利用するということを目指したとき、どうしても必要であると考えていた。保育実習等での指導実習の際に、試作せずに指導案を作成してしまったり、素材や教材に熟知しておらず、思うような活動に発展しなかったりということがある。こうした学生の多くは、指導実習の機会に取組んでみたい事柄を見つけ、指導案を事前作成しておくといった準備は行っている。学生たちが、「設定保育で何をしよう」と話しているのを実際に耳にすることも多く、実習の前には保育実習準備室に準備してある指導案の書式が、すぐになくなってしまふことから考えても、何らかの準備をしていることが分かる。学生達も何も準備せずに実習に臨んでよい、あるいは、臨めるというようなことは思っていない。ではなぜ十分に準備されないのかを考えたとき、理由の一つとして、準備や素材・教材研究をしようというモチベーションをいかに維持できるかが影響しているのではないだろうか。例えば、図書館で実習に役立ちそうな資料を見つけ、「やってみたい」と手応えを感じても、図書館では試作をすることができない。気持ちがあっても、材料を集め、試作するまでに時間がかかるとなると、意欲が半減しても不思議はない。また、場所を移して試作をするとなると、新たな資料が必要となって作業が中断したり、試作が上手くいかなかったりして、「やってみたい」という気持ちが小さくなってしまふことも考えられる。

高橋ら(2011)は、実習の機会を『『実践的指導力を培う』重要な機会¹⁾』と位置づけ、保育者養成課程に在籍する学生を対象に調査を行い、幼稚園教育実習前の習熟度と事後の自己評価について検討している。高橋らの研究では、「教材研究」に習熟している学生は、教育実習体験により、対保育者・対子どもに関する達成度が高いことが示され、実習前に「教材研究」に習熟することによって実習の機会がより生かされることが示唆されている。保育実習準備室は、「保育に必要な情報が手に入り、その場で作業できる」という学内の既存の施設にはない機能を持たせているため、保育雑誌等を見て興味を持ち、学生の素材や教材研究への意欲が高まった状態のまま、その場で実際に試してみることができる。こうした仕組みがあることにより、実習に向けての準備が効果的に行われることが期待でき、高橋(2011)のいう「教材研究への習熟」につながることで、実習の機会を深い学びの機会にしていくことができるのではないだろうか。

しかし、その場で作業できる場さえあればよいのかというと、それでは十分でない。試作が上手くいかなかったり、指導案に書き起こす段階でつまずいたりした際に、気軽に助言を受けられることもまた、「今ここで問題を解決したい」という学生の気持ちを支えるために必要であると考えている。先にも述べたように、様々な道具や素材が準備されていても知識不足のため、保育実習準備室を十分に活用できないことがある。また、例えば、保育資料には3歳児対象とあるが、4歳児を対象にするならどんな工夫をすればよいかで考え込んでいる学生は、実習までの時間を逆算しながら、時間が無いから別の案を考えようと、せっかく素材研究や教材研究を行ったものでさえ投げ出してしまふことがある。この資料も参考にしてみてもどうかという提案や、この活動で子どもが一番楽しいのはどこだろうかといった問いかけに答えていくことで、学生自身が気づき、次のステップに進めることができた事例に度々出会ってきた。保育実習準備室のように、学生がどの段階でつまずいているのかを見極め、適切な助言をする機能があることは、時間切れで試作せずに指導案を作成してしまったり、十分に素材研究ができ

なかったりしてしまう学生の学びの意欲を支える上で重要である。

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」では、「学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換²⁾」について言及されるとともに、「学生の学修時間の増加・確保³⁾」が求められているが、前述の通り2年間の保育者養成課程に在籍する学生の多くは、朝から授業が詰まっていることも珍しくなく、放課後も十分に時間が取れないことが多い。保育者養成課程に在籍する学生が置かれている状況を考えた時、主体的な学修時間を十分に確保できる学生ばかりではないと考えた方が自然である。こうした学生の学修時間を確保するためには、少しの空き時間や隙間時間が活用されるような工夫が必要である。保育実習準備室は、規模こそ大きくないが、「保育に必要な情報が手に入り、その場で作業できる」という学内の既存の施設にはない機能を持たせたことで、実習の準備の段階を支えるとともに、少しの時間を活用した学生の自律的な学びを支える場所であるといえる。

「後で」でもなく「別の場所で」でもない、「今ここで」へのこだわりは、決してないがしろにされてよいものではない。「今ここで」は、学生の学びの原動力である。学生の「今ここで」の気持ちに応える機会を逸せば、次の機会を待たなければならないが、その機会がすぐに訪れるとは限らず、最悪の場合訪れないかもしれない。「今ここで」を大切にせず、学生の気持ちを生かすことができないのであれば、保育実習準備室は道具と資料が備えられた単なる「はこ」に過ぎず、どんなに大掛かりな設備を整えても、学生の実際の利用や、学びの質の向上には繋がっていかない。

2. 学生の姿を捉えることの意味

保育実習準備室は、筆者の研究室と繋がった場所に設置されている。設置場所の最大の利点は、学生の姿が捉えやすいことであると感じている。その理由は、学生の姿からスタートした環境構成や授業改善につなげられるからである。例えば、不織布を使って大きな絵を描いた授業が保育所での実践と授業改善に繋がった事例は、学生からの質問がきっかけになっている。学生が指導実習での指導案を立案すると、殆どの学生が個人での製作活動を題材にする。これまでその理由を、指導案を作成しやすく指導しやすいためであろうと考えていたが、授業で大掛かりな演習に取り組んだことで、実習においてクラス全体で取り組むような活動を実施する際に学生が感じるであろう困難さについて気づかされた。

ふせんを活用した指導案作成の方法^{注9)}は、指導案を書くことが苦手な学生と一緒に、思いついた順にふせんに書き出し、全体の流れを考えてから指導案を作成した経験から生まれた方法である。実際に学生とやり取りをすることで、実習中に記録を書き、指導案を作成したり修正したりすることにどれだけ時間がかかるのか、どこでつまづいているのかを知ることができた。書くことが苦手な学生は、書くことそのものに時間がかかるためか、指導案の書式にいきなり書き始めてしまう。全体の流れが定まっていなかったり、見直さずに提出したりするので修正を求められ、指摘を受けた部分は書き直すことができて、全体から捉え直して修正することは難しく、結局十分に練られていない指導案で指導実習を実施することになる。しかしこうした指導案作成上の問題は、書くことが苦手な学生にだけの問題ではない。書くことがそう

苦手でない学生にとっても、作成した指導案を効率よく見直し、修正する方法を提案することは、「より効果的な実習にする⁴⁾」ために有効であると考え、ふせんを活用した指導案作成の方法を授業でも取り入れるようにした。また、保育ノートは、実習に役立つノートを作りたいが、どうすれば上手くまとめられるか分からないと学生が相談にきたことから、ノートの取り方を学ぶとともに、保育実習準備室の利用につなげる試みとして、授業の中に取り入れたものである。保育ノートを取り入れたことが、保育実習準備室の実際の利用につながっているかについては、今後検討する必要があるが、「頑張った分だけページが増える」といった感想も聞かれ、学生の自主的な学修のきっかけ作りに行かせる可能性がある。

これらの取組みについて、平成27年度の保育実習指導Ⅱを受講した学生に、「ふせんを活用して指導案作成を実施したか」「保育ノートは授業以外でも活用したか」「保育ノートは必要か」質問したところ、「ふせんを活用して授業と実習で指導案作成を実施した」と回答した学生の割合は66.7%、「保育ノートを授業以外でも活用した」と回答した学生は96.9%、「保育ノートは必要」と回答した学生は100%となり、一定の効果を感じることができた^{注10)}。保育実習準備室で捉えた学生の姿から出発し、授業改善や教材開発に至ったことが、こうした成果につながったのではないかと考えている。

以上のように、保育実習準備室は「助言機能」を備えたことにより、学生の姿を捉えやすい環境となり得た。その結果、設置当初は考えていなかった教員自身の教材開発や授業改善の場としての機能も果たすこととなった。保育の実践において、深い子ども理解に基づく十分な保育内容の検討と質の高い保育の実践が求められるように、学生が何を求めているか、どこでつまづいているのかを知ることは、保育者養成においても質の高さが求められる今日、保育者養成校において教員が授業を行う上でも必要な事柄であり、そうした学生の思いを直接感じることでできる保育実習準備室と研究室の距離は、教員にとっても重要な意味があるといえる。

3. 保育実習準備室の可能性と課題

保育実習準備室の可能性として、現任者支援の視点から考えてみたい。平成20(2009)年に策定された「保育所における質の向上のためのアクションプログラム」では、保育所内外の研修の充実や保育士資格・養成の在り方の見直しについても言及されており⁵⁾、現任者の研修の充実が図られているところではあるが、自律型の研修という視点から考えたとき、保育実習準備室の必要な情報が入手でき、その場で利用できるという機能は、日々の保育の準備で日常的に研修の時間を確保することが難しい現任者にとっても魅力的なのではないだろうか。整備にあたって参考にしたカリキュラム開発支援センターは、自律型の研修機関としての機能を重視しており、設備や資料点数の充実はもちろんのこと、平日は午後9時まで利用できるようなするなど、現任者の利用しやすさを考慮した配慮や工夫がなされている。現任者が都合の良い時間に立ち寄り、必要な情報を得たり、素材や教材研究を行ったりする、いわゆるドロップイン型の研修施設として保育実習準備室を機能させるためには、現任者への助言も行える職員の配置と開室時間の延長等が必要であるが、保育者養成課程を持つ短期大学が現任者の研修の場となることは、養成校と現場をつなぐ場を生むことになり、そこで生じる人的交流によって、情報収集の場、卒後支援の場、就労の継続を支援する場等になり得ることを意味し、保育者養成

校にとって十分メリットがあると考えられる。

保育実習準備室は、実習センター形式の独立した施設ではないので、潤沢な予算が確保されているわけではない。現在の規模を維持していくことはできても、利用対象を拡大し、現任者の研修までを視野にいたした場合、予算の確保や規模の拡大は避けて通れない問題である。保育実習準備室という場所が一個人の実践で留まっているうちは、職員の配置、開室時間の延長、予算の確保といった問題は解決しにくい。保育実習準備室が、学生の能動的な学びを支援する大学図書館の新しい形として設置が進められているラーニング・コモンズのように、「その設置目的と運用、そこで展開される学習活動が、あくまで学部学科などの教育部門との連携を通じて、大学の理念や教育目標と密接に連動⁶⁾」していくこと、即ち保育者養成課程における教育目標やカリキュラムと結びつけられ、活用できる場として位置づけられることによって、保育実習準備室は新たな局面を迎えることができるのではないだろうか。

おわりに

本稿の試みは、保育実習準備室を一個人の実践としてだけでなく、保育者養成課程においてどのような可能性を持っているかについて考察しようとするものであった。保育実習準備室は、「必要な情報が入手できること」、「その場で情報を利用したり、活用したりできること」、「助言が受けられること」の三つの視点を大切にしながら、整備・運営をしてきた。保育実習準備室は、この三つの視点があることに意義があり、素材や教材研究をはじめとする実習準備の充実を支援する場所として位置づけることができる。また、保育実習準備室の持つ「その場性」は、学生の自律的な学習の基礎作りにつながる可能性があるとともに、対象者の拡大やそれに伴う予算面の課題等クリアすべき問題はあるものの、卒業生のリカレント教育や現任者の研修機関としての可能性を持っていることを示唆された。

最後に、保育実習準備室は、授業開講日であれば原則として学生は自由に利用できる。保育雑誌を閲覧にきたり、道具を借りにきたり、指導案の書式を貰いにきたりと利用の仕方も学生によって様々である。その中に時々、特に目的もなく保育実習準備室にきているように見える学生がいることがある。こうした学生に声をかけると、実習の準備とは別の学校生活や友達のことだったり、進路や就職に関する話題に発展したり、がんばってといってくださいというようなお願いをされたりする。ここで話される内容は、改まって相談するほどのことではないが、ちょっと誰かに話したかったという程度のものように筆者は感じている。こうしたつぶやきが吐き出されることが、保育者養成にどのような意味があるのかについて、明確な解を見いだせているわけではないが、誰でも利用でき、利用するのに特に理由を必要としないという仕組みが、設置当時のねらいにはなかった役割を生み出しているように感じていることを記しておきたい。

学生の「(保育実習準備室には) なんでもある」という言葉は、保育実習準備室という場所をきっかけにして、学生と直接対話し、一緒に考えるという営みの中で獲得できた言葉である。今日まで設置・整備に携わってきた筆者としては、担当者や研究室の移動、建物の建て替え、または学科などの再編があったとしても、これまでもこれからも学生の学びの支援において大

きな役割を果たし、学生の姿を捉えた上での教材開発や授業改善に取り組める、この保育実習準備室の機能が存続されていくことを強く願っている。また今回保育実習準備室の役割について考察を試みたことがきっかけとなり、新たな場所で、保育者養成校を拠点とした「必要な情報が入手できること」、「その場で情報を利用したり、活用したりできること」、「助言が受けられること」の機能を持ち、学生や卒業生が利用したり、保育者養成に関わる教員等が保育の技術等について提案していける新たな場所が生まれることを期待したい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、惜しみないご協力を賜りました北野珠美先生、今村美智代先生をはじめとする始良市立重富保育所の先生方に心より御礼申し上げます。先生方の姿にはいつも励まされるとともに、保育者養成に関わる一人として襟を正す機会を与えていただいております。また、保育実習準備室の環境維持に協力してくれたこども学専攻の学生にも、この場を借りて御礼申し上げます。

註

- (注1) 平成14(2002)年11月29日(金)～12月1日(日)の日程で長崎純心大学を訪問している。視察日程表の中に、「実習資料室の見学」と記されており、資料室の仕事内容、利用のされ方、資料の種類・内容、学生や卒業生の利用について質問している。訪問した当時、実習資料室には、色画用紙・折り紙・のり・はさみ等の材料や道具、ピアノピース・絵本・CD・パネルシアター・紙芝居、実習報告書等があり、実習資料室を管理する職員が常駐されていた。職員が常駐しているため、学生は自由に利用でき、卒業生も利用することがあるという話を伺っている。
- (注2) 京都市総合教育センター及びカリキュラム開発支援センターの取組については、森木(2010)「カリキュラム開発支援センターの取組みを参考にした保育者養成校における現任者支援のあり方」、『鹿児島純心女子短期大学紀要』、第40号、pp.49-61で考察している。
- (注3) 例えば、平成20(2009)年告示の保育所保育指針では、保育の質の向上を図ることの必要性が強調され、組織的な保育の質改善への取組みが求められるようになった。平成23(2012)年の保育士養成課程の改訂を受け、保育者養成校は「保育実践力」を持った保育者養成を育成し、輩出することが求められている。
- (注4) 設備は全て平成27年7月31日現在。
- (注5) 道具類のうち、のり・はさみなどは、教員が授業でも使用することができるよう、1クラス(30名)分程度は準備されている。
- (注6) 実際の利用者の9割以上は学生である。
- (注7) 平成21年度からは、保育実習準備室に職員が常駐しなくなったため、保育実習準備室は主に筆者一人で物品の管理・消耗品の補充を行うことになった。筆者が不在でも何をどれだけ使用したかを把握し、消耗品の補充をスムーズに行うために、学生には保育実習

準備室の消耗品類（例えば折り紙、色画用紙、丸シール等）を使用する場合には、「消耗品使用届」への記入を求めている。平成27年4月1日から平成27年8月2日までに記入された届は、161枚となっている。

(注8) 後日、10月30日当日の活動の様子を撮影した写真と、子どもたちの作品を送っていただいた。また、10月18日の型紙作成の様子も写真で送っていただいた。

(注9) 詳細は、森木（2014）「ふせんを活用した指導案作成方法の研究－保育実習指導における指導案作成上の課題－」にある。

(注10) 保育実習指導Ⅱの事後指導において、教育支援moodleのフィードバックを利用し、回答するよう求めた。回答期間：平成27年9月7日～平成27年9月21日、回答率：92.1%

引用・参考文献

- 1) 高橋裕子・大瀧ミドリ・今村聡美（2011）「幼稚園教育実習における事前準備の習熟度と事後の自己評価について－『教材研究』『子どもの気持ちの読み取り』『満足度』の観点から－」『東京家政大学研究紀要』第51(1), pp.7-13
- 2) 中央教育審議会 平成24年8月28日 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ－（答申）」『4. 求められる学士課程教育の質的転換』 p.9
- 3) 同上 p.11
- 4) 厚生労働省、平成22年3月24日、保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」、(3)改正に当たっての基本的考え方、②より引用 <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0324-6a.pdf>
- 5) 厚生労働省 平成20年3月28日「保育所保育指針等の施行等について」雇児発第0328001号：別添4『保育所における質の向上のためのアクションプログラム』
- 6) 山内祐平・林一雅・望月俊男・西森年寿・河西由美子・椿本弥生・柳澤要 「学びの空間が大学を変える」第2部 図書館の変革－ラーニングコモンズ Part.4 自律と協同の学びを支える図書館 P.106 右20-24行

